敦煌本・南北朝期維摩経疏の系譜

平井宥慶

『維摩経』の漢訳史には、厳仏調、支謙、竺叔蘭、竺法護、祇多密、鳩摩羅什、玄奘の名が登場するが、現存する訳本は、支謙と羅什と玄奘の三本である。この中、支謙訳本についてはかつて竺法護訳との混同乃至は修正加筆説が論ぜられ、更に近時敦煌資料の検討から、この本の晉・支敏度編『合維摩詰経』たる可能性も指摘された。このことは羅什訳以前の維摩経流伝史にかかわる問題であるが、敦煌資料が中国仏教史上失われた記録の一端をかいまみせてくれる可能性をも示唆するもので、以下の論及も今日に残されなかった中国仏教史の一面を明らかにする意図をもつものである。ともあれ一度羅什訳が世に出るや、その研究講説はあげて什訳に依ったこともまた事実といえよう。

さて魏晉南北朝期において高僧伝類に知られる維摩経研究講説関係者は、僧肇、僧叡、道生、道融、曇諦、僧導、僧鏡、僧宗、法安、宝亮、法雲、智蔵、慧超、慧約、道辨、明徹、宝瓊、警韶、僧範、慧順、霊詢。隋代にかかる人を含めると、慧遠、智脱、霊裕、智琳、智顗。吉蔵。勿論伝録されなかった者もいたであろう。しかしこの期における現存の疏は、伝僧肇編『注維摩詰経』、慧遠『維摩義記』八巻、智顗『維摩経玄疏』六巻、吉蔵『浄名玄論』八巻、同『維摩経義疏』六巻のみで、中でも『注維摩詰経』の後世に与えた影響の深さは、つとに喧伝されている。

ところで、敦煌出土漢文文献中にある維摩経疏類を時代によって大別すれば、隋以前のものと八世紀以後のものとに分類できるようで、後の場合、道液の『浄名経関中疏』『同関中釈批（抄）』並びにその序の複注である体請の『維摩疏釈前小序抄』の写本が圧倒的に多い。それらには注維摩の影響大なるものがあって、敦煌文献にはこの写本も出土している。今とりあげる隋以前の維摩経疏類を分類するにあたっては、その叙述形式（注釈方法、分科々段法）、引用文献、思想内容にわたって検討するのであるが、筆者はかつて法華経疏について分類し、その類型を他経疏にも拡大する試みをなし

た時、維摩経疏に若干関説した。今はそれを維摩経に専念して追究しようというのであるが、思想的な面からいうとき、維摩経の場合は注維摩の影響の多少が着眼点の一つになる。

○慧遠『維摩義記』四巻（大正三八・四二一a～五一八b）(イ)S四一〇一（G五五五六）―四七三b一七行～四八〇a二〇行。(ロ)S二六八八（G五五五九、T二七七〇・大正八五・三五五a～三六四b）―四二七c二五行～四三七a一九行。(ハ)呂96―四五〇b二行～四六八c二二行。(ニ)P二二一八―四七三c四行～四八〇b二四行。

浄影寺慧遠（五二三～五九二）は地論宗南道派法上（四九五～五八〇）の弟子で、北周武帝（在位五六〇～五七八）の廃仏に反対したことは有名。彼の『大乗義章』は南北朝仏教学の「集大成」とされる。その慧遠にかかわる古写本が発見できたことは極めて興味深い。敦煌写本中には『大乗義章』と無関係とは思われない文献が存在するし、『勝鬘義記』の残巻逸文も報告されている。その上この『維摩義記』の写本が現在四本発見されたことから、彼の著作が少なからず流布していたことが知られ、中国仏教史に伝えられる彼の重要性が時代に即した資料によって裏付けられるともいえよう。(イ)(ロ)(ハ)三本はどれも記述の字体・形式を異にし、修正加筆のみられるところから、複数の者による修学の一端を示すといえる。

疏本は、『続高僧伝』巻八に、彼は廃仏におわれて「潜二於汲郡西山一勤レ道無レ倦、三年之間誦二法華維摩等一各一千遍、用通二遺法一」（大正五〇・四九一a）とあるから、常識的にはこれ以降撰述されたと考えるべきで、特に宣帝複仏から隋にかけての仏教復興期に多くの著作を残したと考えると、G目録（ジャイルズ）が(イ)本を六世紀写本とするのを信ずれば、(イ)本は彼の講筵とあまり遠くない時期の古写本となる。現行本と比べるに、字句の対応は意外にもかなり良好である（古本と現行本では相違個所の少なくない場合が多い）が、巻数が決定的に相違する。大正本は正徳三年（一七一三）本を底本とした四巻本で、各巻に更に本末あり。それが敦煌本では不分巻。原本は一巻本であったと考えたい。『続高僧伝』の記録が巻数を記さない、現行本の分巻が内容からみて唐突と思われるところでなされる、の理由も傍証になろう。『義天録』では四巻（大正五五・一一七〇a）。一巻本とすればいかにも長いという印象もいなめず、講録伝授のうちに現行のような分巻が成立したのであろう。分巻の相違は流伝の変遷をみせてくれる。

なお関説したい写本がある。潜43は三紙弱の断片で方便品後部の釈を残すが、経文「是身不浄穢悪充満」（大正一四・五三九b25行）につき五種不浄を述べ、これが慧遠疏（大正三八・四四三c）と近同である。五とは種子・住処・自体・自相・畢竟の不浄。潜43は「其五者」といいながら三・四を合して自性不浄という相違はあるが、現在疏でこの釈をするのは慧遠疏のみで、おそらく影響あると考える。ただし潜43に

はわずかな残巻に「韓詩」「荘子」「謝霊運」「倶舎」「成実論」「大論」「羅什」「雑心論」「経部師」「大乗宗瑜伽論」「遮尼乾子経」「法集経」の引用がみられ、全体としては極めて多数の引用典籍を有したと思われるので、かなり後のものか（道液疏の前後が目安の一つ）。生9も二紙にみたぬ断片で方便品後部釈を残すが、一部述文に一致をみ、しかも「経部宗」「大乗宗」「婆沙論」「雑心論」「十住断結経」「遮尼乾子経」と引用も豊富なところから、同趣旨の疏とみられる。そして背面に「中明方便品下尾義記」と大書きしてあるのは興味深い。義記なる尾題をもっていたのか、その名の疏に何らかの関係をもっていると考えられていたのか。服91は『劫余録』に潜43の前と指摘されたもの。「釈方便品」と始まる二紙弱の残巻。多数の引用という特徴から関連のものとみて大過ないと考えるが、この時代にまで慧遠疏の影響がみられることは記憶に留めるべきであろう。

○吉蔵『維摩経義疏』六巻（大正三八・九〇八c～九九一b）

S六五八三（G五五四二）―九五六b二行～九六六c二二行。

吉蔵関連文献は、法華経疏関係でも発見されているから、これも注目される。この本についても、大正本は観衆生品第七から巻五になるが、この本は分巻されていない。当本は六巻本ではなかったか、分巻に相違があるかということになる。『東域伝燈録』には彼のものとして『浄名玄論』の他に「略疏五巻」「広疏六巻」（大正五五・一一五一b）が列記され、続蔵経には『略疏』五巻なるものが収載されて、今日この二疏を土台に『義疏』六巻が成立したと考えられている。『義天録』には「疏十二巻或六巻」（同一一七〇a）とあり、巻数には問題があったごとくである。敦煌本が古写本であることから、字句の校訂に重要な役割を果すと考えられる。

始78に関説する。この本は二紙弱の断片で、仏国品「在毘耶離等」からの釈ありて、その冒頭に「吉蔵法師云」と引用する。その他「新云」「西域記」「応法師」「真諦記」「善見婆沙」「劉虬注法花」「晉朝支道琳」「生法師」「仏地論」「智論」「果因経第二」「浄目女問舎利弗経」「倶舎頌」「崇福」「四分律」「涅槃経」「東塔」「十地論」「荘子」「大品経」「仁王」「天台」「沢州」など、多数の引用を誇るのが特徴で、大唐西域記成立以降のものであることは確実。道液の『関中釈抄』と引用形式の類似もみられるが、彼には吉蔵の引用がないから、それに近い（時代的乃至思想的）ものか。P二三四四本はこれと同一のもの。吉蔵の影響がみられる疏という意味で後勘を待つ。

IS二一〇六（G五五二四）尾題「維摩義記」T二七六八（大正八五・三二九a～三三九c）弟子品中～嘱累品尾完。不分巻。後記「景明原年二月廿二日比丘曇興於定州豊楽寺写訖」。

景明は北魏宣武帝元年（五〇〇）、定州は中山ともいわれる

現在の河北省保定（五台山の東約一五〇キロメートル）か。豊楽寺は僧伝類に見出されない。曇興についても慧基（～四九六）の弟子にみられる（大正五〇・三七九b）が、慧基は宋斉に活躍したようで、その弟子とすれば北魏定州と地理的に結びつくか。ただし時代的には必ずしも齟齬しない。慧基も維摩（その他の）経を善くしたという（同三七九a）。いずれにせよ当本は注維摩につぐ古さに注目されるが、その注維摩や他疏に言及しない（「中観」「十二門」の引用一回づつ）。これは特徴の一つである。各品の始めに必ず品の来意釈あり。次に品内を大略段落に分け、以下経文の要句を「―者」と出だして釈す。これが当本の基本注釈形式である。段落の経文配当に「従―以下」も使用される場合がある。「所以此品興」（文殊品・観衆生品）とあるのは定型句というべきで、特徴の一つ。全体の科段は、序―仏国品初から同七言偈経。正―偈後から見阿閦仏品。流通―後二品。これは天台の科段に一致（『文疏』『略疏』）するので看過できない。また天台のいう北地地論師の分科とも序正の区切り方が相違する。重大な関心をはらうべき写本である。

Ⅱ(イ)S二七三一（G五五二六）尾題「維摩経義記巻第四」T二七六九（大正八五・三三九c～三五五a）。仏道品初～嘱累品完。後記「①竜華二儒共校定也②更比字一校也③大統五年四月十二日比丘恵竜（ママ）写記疏通④保定二年歳次壬午於尔（ママ）綿公斎上楡樹下大聴僧雅講維摩経一遍私記」。(ロ)辰32尾題「維摩経義記巻第三」問疾品初～観衆生品完。後記「①一校流通②稗瓊許□□③大統三年正月十九日写訖」。(ハ)S六三八一（G五五四〇）弟子品初～菩薩品中。「菩薩品第四」の下に「業許」。(ニ)夜43―仏国品中～弟子品初。(ホ)師77―弟子品中。(ヘ)帝41―弟子品中。(ト)P二二七三「維摩語義記巻第一」

(イ)(ロ)の同疏たるは『鳴沙余韻解説』も指摘する。西魏文帝の大統三年（五三七）以前に撰述され、少なくとも北周武帝の保定二年（五六二）までは疏通していた。しかし恵竜、大聴僧稚、尔綿公、どれも僧伝類にはない。この時代だと慧遠、吉蔵、智顗の疏はまだ無関係。注維摩その他疏の具体名引用がまったくなく、「又一解」「又解」が多用される。これが特徴の一つ。各品の始めに必ず品名来意を釈し、次に大分科あり（従―以下）、その中で更に中分科されるものもある（Iにはない）。以下要句を「―者」と出だして釈す。これが基本形式。分科法が深化しているといえよう。品来意釈に「此品所以来者」の定型句を特徴とす。後二品を疏通とする。天台によればこれは北方地論師と開善法師、そして自身であるが、開善の経全部を四分するのには当らないようで、当本はその時代性・地域性から、分科ではIと同列のものと予想しておこう。(ハ)は以上の特徴によく相応するので、この類型に入れる。G目録が五世紀写本とするのは、ほぼ信ずべ

きであろう。(ニ)も類似する形式を有する。注目すべきは「仏」を「ム」と記す点で、Ⅰに例があり、『鳴沙余韻』が「古珍」というのに従えば、時代的にも近いとみておこう。(ホ)(ヘ)にも「ム」字あり。Ⅰに含めないのは「又一解」の叙述があるから。(ホ)には「成実云」「異解云」の引用もある。Ⅰは引用のないのが特徴であった。T二七七四・中村不折氏蔵本もこの類型に入れておく。ただし(ハ)以下と(イ)(ロ)の関係は今後の問題である。なお裳5は弟子品の一部を釈す二紙に満たぬ残巻で判断に若しむが、「又一解」の例がみられ、関係のものとみてよいかもしれない。S三八七八（G五五二五）は「維摩経義記巻第一」の尾題をもつ。二紙の断片で、方便品末の釈を残すが、形式はこの類型に相違し、「摂論」の引用あり。後記に「空蔵禅師□」とあり。題記の同一からここで論ずるが、Ⅱと比すれば、少しく後のものか。

Ⅲ(イ)昃26―問疾品中～仏道品偈初。(ロ)昃24―仏道品偈初～菩薩行品後。(ハ)昃23―菩薩行品後～菩薩行品完。

三本は同疏か。『刋余録』は同写本の切断されたものとみる。Ⅱとは違う疏であるが、叙述形式はかなり近似する。Ⅱと区別したのは、「又一解」等の引用が極めて少いこと（「又復一解」の例をみる）、強ていえば中分科以下の段落が明瞭でないことによる。三本とも「仏」を「ム」と記す。Ⅰ並びにⅡ(ニ)以下の写本がこの例をみせているが、これらと同視しないのは右の理由による。『刋余録』がⅡ(ニ)をこれらに「相似」というが、Ⅱ(イ)以下の関連で考えるとき、若干の相違を認めざるを得ないと考える。ⅠとⅡの間に位置するが如し。

Ⅳ(イ)致62―仏国品偈～問疾品初。(ロ)謄47―問疾品初～嘱累品中。

『刋余録』が「筆跡紙質皆同」とする。信ずべきと考える。品来由の釈（定型句なし）に続いて大分科を示し、中分科以下の存するところもある。経文自体の注釈が極端に少い（乃至は、ない）。これを基本形式とする。Ⅰと一致しないのは釈文の対比で明瞭だが、類型にも含め得ないのは以上の理由による。Ⅱに含めないのは、この二本でほぼ全篇の釈が得られるのに「又一解」をはじめ引用経論がないという理由も加わる。科段が、序―初から菩薩品、正―問疾品～見阿閦仏品、流通―後二品。これが伝聖徳太子『維摩経義疏』に類似するのは興味深い。義疏は見阿閦仏品の「仏告舎利弗」以後を流通とする点が違う。その異同の意味は今後の課題としたい。ところで当本には年記がないので成立時確定に問題があり、『刋余録』に「此釈各品要義」とあるを考えれば、唐以降のある疏の要義釈抜書きともとり得るが、品名を出だして分巻を示さぬ点、もともとそれほど長いものではなかったとみたいがどうであろうか。長いものでないのは、常識的には初期成立と考えたいのである。一応今の南北朝期の項で論じておきたい。

（大正大学総合仏教研究所研究員）